

門伊部
號148
卷1



水雄岡志卷第一目錄

水雄岡及以小野方疆圖

水尾大上天皇本紀

深殿后 良房云

嵯峨太皇太后

名虎善男位論相撰の誤

朝親 毅杖

姁盈七日功德

東宮御服

即位

諸神一階を進めら敷

深殿

檀林寺

太一定分乃厄

天皇崩御

每至七日敬禮續經

鳳輦

十陵口墓

崇親院

源家姫

一戸租

御葬送諸司

方相輜車

三會講所

延命院

明治三十七年
十月十一日
購未

最上善心證

嘉祥寺

饒益神寶

渤海國

文章博士職

分回を増

石清水八幡宮

孝經御讀

廿一回忌

長慶宣明曆

論語御讀

菊酒

時政乃是非を論せしむ

六十賀 長房公

天皇元服

藤原多美子女御とみ教

僧正法

印僧都法眼律師法橋乃之位を立

深殿弟花

亭文武乃御遊

市籍人諸司諸家入仕人等を

禁

平城宮

六代乃親之

揚名乃任

受戒式

内裏と東宮乃方位

御靈會

御本命乃禁忌

内裏佛名懺悔

女御年終

燒尾荒鎮

米一升口十文

多治比真人

水目

貞朝長

百花亭

天台真言兩宗教

延曆寺に條禁式

傳教大師慈覺大師謚号

伴善男

邊要乃武備

鷹鷄を養ふを聴

藤原高子女御とみ教

近衛兵衛公結夜行

常平倉

畜錢乃勅

天王像

米大臣食

封

皇太后に十賀

陽成院降誕乃端

立太子

貞觀格

服御常膳を減せら敷毎々詔旨

封祿半減

博多津乃警固

壹岐島乃武器

貞觀永寶

新羅國

諸王季祿

保依

楠字袋

牛革甲

羊革甲

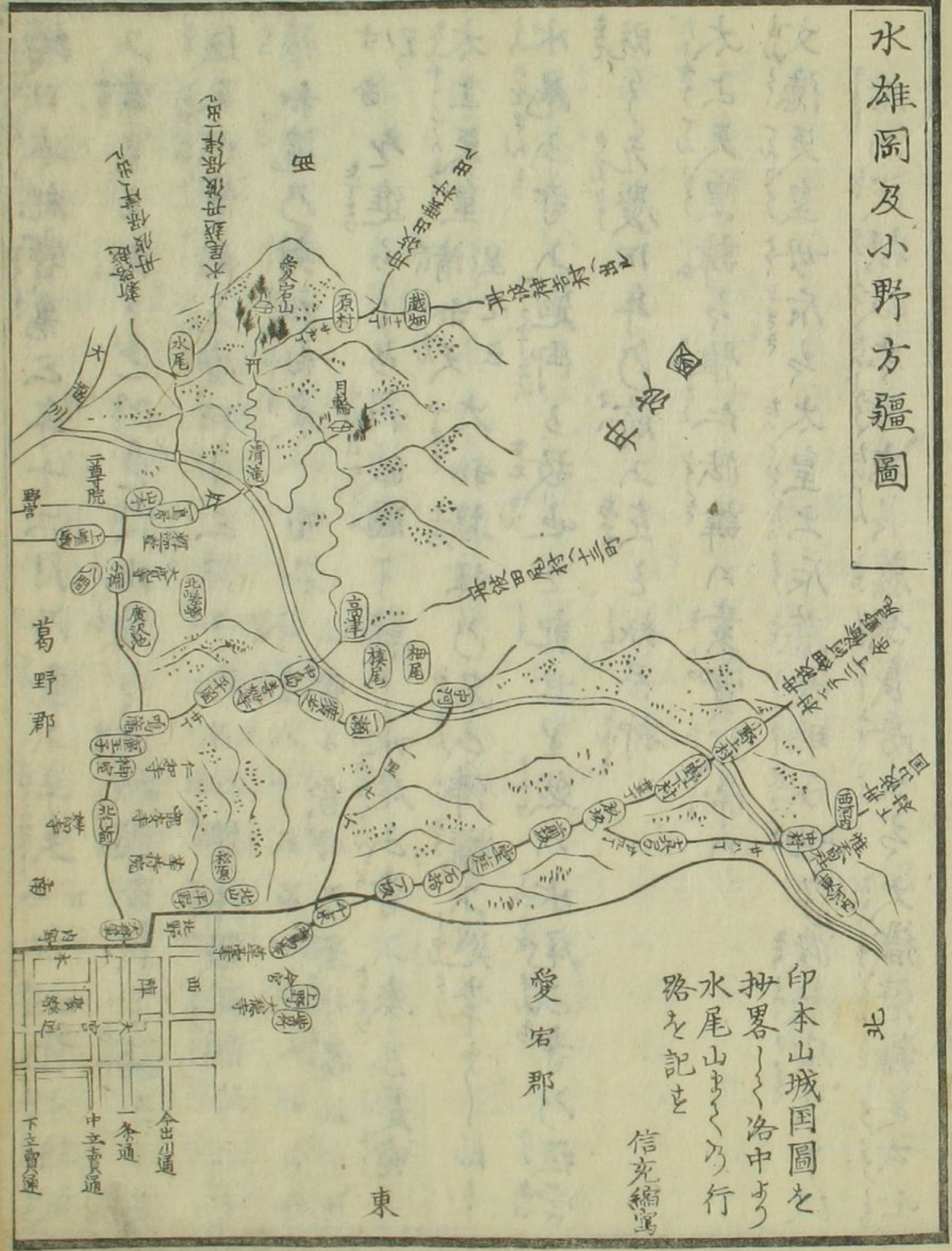
六士式

紫宸殿視事

水雄岡志卷第一目錄終

貞觀式 百姓の葬地 皇祖母表判
 渤海國貢獻交易 惟喬親王出家 皇外祖父
 服判 父母乃表了官を辭たる日等并
 五墓 之合乃厄 皇子み源氏を賜ふ
 皇太子朝觀 群書治要御讀 千字文御讀
 史記御讀 比叡山文珠樓 顔氏家訓教授
 讓位 清和天皇尊號 院御封 勅書式
 落飾入道 頭陀仏遊 水尾公入御 圓覺寺

水雄岡及小野方疆圖



印本山城国圖を抄畧し洛中より水尾山まわりの行路を記す
 信克編寫

愛宕郡

東

續日本紀寶龜三年十二月乃乘小卒去廿五日山背水雄岡
不幸と記さ也川邊及水雄々山城國を論ふ其
後三代實錄元慶四年三月十九日伊勢尾張兩國を以て
清和院乃封租白米一百石今量八十三石六斗六升六合
寸を進らしめ丹波國を轉し水尾山寺を奉ふ是時
大上天皇清和天皇大和攝津乃名ふ佛籠を巡幸せし由し
水尾山寺を廻御し故也と記せ且然ハ水尾山寺乃經堂
既元慶四年乃前ふ在と知子折
大上天皇諱々惟仁法諱ハ素實父帝ハ
文德天皇母后々大皇太后藤原明子世々深教后と中次
后乃又攝政也改大臣藤原良房公也大織冠鎌足公七

水一ノ一

代乃孫ふ閑院贈大臣冬嗣公乃二男な里母々
阿波守藤原真作大織冠乃孫左大臣武智磨の乃女尚
侍美都子延暦廿二年閑院乃弟ふ誕生天長三年父乃
表了衰ふ時了兄贈大臣長良公家を嗣玉ハハ良
房公也いさく正六位乃中判事刑部省乃屬中判事
ふく生々天長八年從六位下叙ハ大學頭ふ任ハ岡
七年 仁明天皇乃春宮了て在在ふ冬仕奉々春宮亮
と關也居る々越中推守を兼たしハ後程かく加賀
守を兼ら致良房公也時廿七歳其家祿ハ田乃外
代稻入千束お里米今量ふく二百四十七石二斗九升
と絶ハ足織ハ屯布廿九端庸布百八十常あり又加賀
乃公辭今量千九百八十三石余ありハ斗ハ加賀

九百二十九儀ふ當る然也ハ總々同十年 春宮受禪
又子六百七十七儀許と知へし
ありしふと了 左近衛少将ふかき終大也共加賀守ハ
元乃如く 賜ふせらせんとす 爲なり 藏人頭了補せらせ
く大小乃公事を奉行し 朝辨乃淺深を幹理し 初々朝
家祖要乃顯職ふ昇らせし 門葉闕閑乃供基を開けし
り教了 承和元年参議了任し 猶藏人頭也 初乃如く同
二年後三位了叙し 推申納言ふ任し 左兵衛督を兼さ
せら敷 後三位乃食封百戸位田卅日所 祿絶廿日足繼
組税 同九年大納言了 陸奥右近衛乃大將とあり 嘉祥
元年右大臣ふ拜し 衆務を統理し 綱目を奉持し 庶事
了 總判大也 時ふ正二位あり 食封二百戸位田卅日所 祿絶廿日
右大臣乃食封二千戸 職田卅日所 祿絶廿日

水一ノ二

足繼口千屯布百丈端銀二百 正親町乃南京極乃西了
にとに分回乃收納ありし 一 冬嗣公乃家
第を作し 櫻花園を植し 深敷と名付ら敷 院乃家
二 新乃南西洞院乃西一町あり 長良乃を傳領し
大里御長良乃又近衛乃齋室町の東に 藤原乃
教と云 昭宣公乃傳とあり 室家乃源紫姫 嵯峨天皇乃
左大臣傳平公乃女あり 室家乃源紫姫 嵯峨天皇乃
皇女ふ也 仁明天皇乃姪あり 姓録了 弘仁
ハ大同元年己丑乃誕生 仁明天皇ハ弘仁元年庚
寅乃誕生 去里因云六十圖あり 己丑乃谷洞乃火と云 良
房乃甲申ふと云 合考ふへし 母ハ當麻氏 嵯峨天皇
掃部大出と云 合考ふへし 母ハ當麻氏 嵯峨天皇
婿を選せ給ふし 良房公乃風操越倫たふを挽せし
也 殊了 勅し 之也 嫁せし あり 天長七年女子一
人生也 給へし 是即深敷后あり 承和八年十一月正日
位下ふ叙し 卅三 仁壽元年十一月七日從三位あり 陸奥

同三年二月晦日冷泉院行幸乃時小深殿第へ幸あり
て櫻花を賞せらるる三月四日紫姬了正三位を授らる
同年四月より條殿第へ行幸ありて親王諸王公卿
と花乃宴せし勢らるる釣教了御の釣魚を觀せらる
射教了遷御らるる弓矢を召せらる東門了成せらる
て耕田農夫田婦を憐れせ給ひ望遠亭へ還御在る花
を觀せしけりて其類聚國史蓋紫姬を當今乃伯母
君了在る故あふへ齋衡三年六月廿八日行年四十
八歳あり良房公了先立り薨るる甲斐公了天安
元年正月廿一日良房公右大臣を辭中させ玉人と云
と中御許あり廿六日又上表ありしと中許させ給

永ノ三

又二月十九日右大臣不拜玉弟乃良相乃大納
言を右大臣とさせし然る廿三日良房公右
大臣を君人乃則を取とあり玉燭乃調人攸其人か
らせは則闕と云臣の身勝せと稱し辭表を奉らる
去り共御許あり三月四日重ねる辭中されしハ寶
劍一雙を賜ふ勅答了式劍を帶し朕の懇情ハ副
よとありし御許あり且車に乗るる入朝せし是
乃仰あせしと固辭て受らる七日中上表去
り今新加賜封戸職田資人帶刀等乃類一切不辭中
させしは十九日勅答了新加邑封戸を停め給
ひし良房公を忠仁と謚し朝廷乃顯貴ありて千戸四十

町ハ榮祿あり然るを辭て然る後朝了云五人を賞
尋常乃人乃自衛之官を干め祿を貪ふ情と目を同く
へく論を以て年令字乃大般若經一部を書寫志く之專
諸夫十方衆類一切靈鬼乃奉為小至心發願を果了功
徳乃妙力頼る聖主乃休符を増中宮乃吉祥を保れ
玉宸曾る霧露乃侵かく錦區永く風塵乃撃を断んと
乃懇志ありと也 此大般若經貞觀十八年十一月廿
又日圖書繫了安置されし由三代
實録 同二年八月廿七日 文徳天皇登霞中一箇之
皇太子即位乃後乃御外祖父と云師範儀形乃大臣と
云を以て萬機を攝政あり終ハ以て依る准之官乃
宣旨を成也食封 時小復一位あり位田七十町
乃湯沐二千戸祿絶之而足綿又百屯系又百約布千端
鋤千口鉄又而廷を給人と同也今小准しくハ九指三

水一ノ四

十二万八千八百東餘小打了米今量一万六千二百十
之石云斗又升余あり不ハ斗八口万五千三十三儀余
小當内舍人 職負令了中務省乃属了九十人とあり里帶
る小分衛と見之軍防令小女入位以上乃若乃左右近衛
子孫年廿一以上乃若を内舍人小老と見也 良房之履歴
等隨身帶仗資人三百人を賜ふと云里 次々了分疏也
嘉祥三年三月廿八日 左京一條深殺第小誕生す一子以
但去廿一日 仁明天皇崩御今日乃山城國紀伊郡深草山
小葬送たすま川るところ中納言從三位源定 嵯峨天皇乃
皇乃 安倍安仁大藏卿平高棟以下彼處不行向人 録入見
文徳天皇乃御服たすま川里倚廬小御座以御座
養乃式いらふありし小中記せし者もあらず又月十日又
十日小當らせ給へしと云代月口日 嵯峨天皇崩御在

嵯峨天皇太后諱嘉智子内舍人贈大政大臣正一位
橋清友乃女母八回氏 嵯峨天皇乃親生久御座
時入納幣終入即位乃後使人子進弘仁元年 仁明
天皇誕生一箇一箇同六年七月皇后入墜入御年卅
二 仁明天皇即位ありく大皇太后と関与給入嵯
峨野小檀林寺を草創おせせら也唐義空和尚を請出
て開祖とて持律乃比立尼をて住持せしむ 朝廷
封入百戸を施して供養充入と也 天平十九年又
一戸田租は十束を限と改称せしむ 月成寅乃定め
然らぬ又百戸入二萬束お里米今量九百六十石
七斗七升有へし 又皇太后乃弟右大臣良氏公
千口百廿口依余不當
朝臣と議て學館院を開き子弟を勧て經書を誦習せ

去む世人漢乃鄧皇后不此せしと也 後漢和帝乃鄧皇
畫の婦業を修め暮ハ 仁明天皇不豫たかしく篤
經典を誦まると云里
と聞食遂に御髪を剃せせら也眞救を求むと云共
其驗形く崩御を志のば皇太后も打續く崩せせ終入
御年六十又或も檀林皇后と云称也
文徳天皇乃祖母后了御座ハ新誕乃皇子不也曾祖母不
當せ玉小然ハか屋く乃式外祖乃大臣良房乃設か入
御名も惟仁天皇の御名始仁乃をりて親王とあせ給
以御名車里一殿日親王宣十一月廿又日皇太子了立せ
玉小東宮乃傳了ハ大納言後二位源信 嵯峨天皇乃皇子
年卅十一深敏后の 大史了ハ冬儀正位下後原良相
母案姫乃弟たり



産所圖
 女怪卷所載

信充編寫

公乃第廿學士了ハ後ハ位下大枝音人
年二十ハ
成十亮了ハ後ハ位下藤原冬緒
度乃を任一給人同晦日中納言安倍安仁宮内大輔房世
王を暖城山陵大覺寺乃内北方乃ハ冬議左兵衛督藤
原助大舍人頭高枝王を深草山陵ハ遣一皇太子を
定給人仕を中させ給人

三代實録ハ是ヨリ先童謡ハ大枝を越一
騰躍トウヤ里超一我ハ護ヨる田ハヤ抄ハ
支岐ヤ雄々ハ支岐カト云是時
子一ハ第一惟喬親王
王嘉祥二年誕生
母ハ惟喬ハ同
第三ハ惟彦親王
嘉祥三年誕生
母ハ惟喬ハ同
源野貞女ハ但元慶

七年薨也年十四ハ云ハ依一推考也ハ承和七年
乃誕生ハ文徳天皇十四歳乃時乃御子ハ里行考
ハ皇太子ハ弟ハ皇子ハカハ三兄を越一云ハハ
兆ト云里又公卿補任ハ寛平九年右大臣能育ハ十三
歳薨也文徳皇子ト見也承和十二年乃誕生ト知ハ然
ハ皇太子ハ弟ハ皇子ハカハ又源平盛衰記ハ惟喬惟仁
位論乃説を奉左兵衛佐紀名虎ト善男乃少將ト相撲
乃勝負せ一仕を記せ里然也共名虎ハ承和十二年ハ
卒也皇太子誕生ヨリ三年前ハ里位論ハ與ハハ
謂カ一
仁壽二年三月十六日高僧及ハ沙弥練行乃若各州二人
を東京ハ請一三日を限一火般若經を轉讀せ一也

玉人 文德實錄 皇太子今年之歲也一定分乃厄也當らせ

給ふ了故了代厄乃祈禱乃為ふ乃也了如ふ了

太一定分乃厄也階蕭吉乃五行大義了所謂遊年行年

乃説ふ了了太一行宮乃法也里子年乃歲也生也了人

乙寅申乃歲二月九月子午乃日寅申乃時一定 皇太子

降誕仁壽二年壬申 丑未乃歲也生也了人乙卯酉の歳

二月十六日壬午 卯酉乃時一定寅申乃歲也生也了

人乙辰戌乃歲又月十一月寅申乃日辰戌乃時一定卯

酉乃歲也生也了人乙子午乃歲六月十二月辰戌乃日

子午乃時一定 辰戌乃年也生也了人乙巳乃歲也

生也了人乙丑未乃歲二月八月己亥乃日丑未乃時一

定と云

齋衡元年八月十日皇太子始了謁觀世世孫人 文德

今歳也五歳也了了了同三年正月三日皇太子朝見乃

後十一日乙卯日也當也ハ皇太子御杖を獻じ玉人 齋衡

二月の雪後深し依り朝賀を停む

内裏式乙正月乙卯日獻御杖式 天皇紫宸殿乙御也

即春宮坊大史以下御杖机を舉皇太子相杖了日華門

より入南階を升里簀子敷乃了了樹了退出を若皇太

子不參入時ハ坊官を了了獻了了と也也ハ弘仁乃頃

了起れ式と知へ了 内裏式乙弘仁十二年正月廿日

乙前文德實錄仁壽二年正月己卯諸衛府毅杖を獻里

精魅を逐と見也殺とハ大剛外之説女ヲ注一夫也ハ
漢代了行を也一剛外乃てと剛也杖ハ延喜式ハ曾波
木 倭名鋤ハ根枝乃字 比々良木葉年保許桃梅燒椿皮
を充也共詳あら以 椿黒木を用也牙世云々

天安二年八月廿三日 文徳天皇冷泉院了去々倉卒ハ
不豫了在と々近侍乃男女精を失ハ騷動あ入と限あ一
廿二日皇太子嘗藥ハ侍せ玉ハと云共御惱劇く去々
叡詞通せ以夜ハ入く文章博士菅原是善を以詔書を草
せしめ去改大臣ハ 勅を奉く々左右檢非違使を召常
赦了免き所を除き大辟以下乃罪人咸く赦せ也廿
八日親王公卿冷泉院乃東釣臺ハ候く々護夜あかり

廿六日詔く々天下ハ大赦行を也且使を遣く々近江
美濃伊勢山城國乃關を固めく往來を亂さめ又使を發
く々々左右兵庫左右馬寮を警固せく々例ハ廿七日
遂く崩御ハ不實筭三十二元近少將良岑清風右近少將
紀金吉將監將曹近衛を率く皇太子乃直曹ハ陣を張ハ
今ま々皇太子乃帶刀舍人と々宿衛せくハ陣を罷く退
散ハ頓く大納言右近衛大將安倍安仁左近少將坂上當
道右近少將藤原有貞等天子乃神璽寶劔節符鈴印を奉
く皇太子乃曹ハ賫入也少納言攝清蔭藤原基經中務大
輔清原胤雄皇鈴等あ也ハ從入
職負令ハ少納言鈴印傳符飛驒函鈴を請進と見ハ又

中務屬小大主鈴小主鈴鈴印傳符飛驒函鈴を出納を
を掌と云里

右改大臣 良房 左大臣 源信 右大臣 良相 皆皇太子乃直曹

不侍云ふ其他乃公卿之藏人所不於之葬送乃司之定

ら敦装束司 中納言一人 冬議二人 日位三人 又位二人 六

山作司 同 上御 養役 史司 日位一人 又位二人 六位二人

作路司 山城守 右京推亮 前次第司 中納言 次官 一人 判官

人 主典 二人 出也 右御葬乃前不後以在里後次第司 一人 冬議 次

官 一人 判官 二人 主典 二人 出也 右御葬乃後不後以在里

と於里又關固め大夫公城近江美濃伊勢乃國司及使乃
許へ崩御乃由を告次ふ皇大夫人を東大條宮より迎入

せく皇太子乃擁護とあせら敷

皇大夫人ハ藤原順子を云贈太政大臣冬嗣云乃女云

弘仁十四年 仁明天皇乃いあく皇太子と申せし時

より宦中より天長四年 文徳天皇誕生より

仁明天皇踐祚乃初從日位下ふ叙し女御とあせ連

和十一年從三位進之 文徳天皇即位ありしかば

皇大夫人了上奉里やろく東五條院了後皇住せ玉ふ

然ハ世ふ又條乃后と称を警蹕乃儀を急ぐ乘輿に擬

へ里又左右近衛將監番長各一人 近衛各九人 左右兵

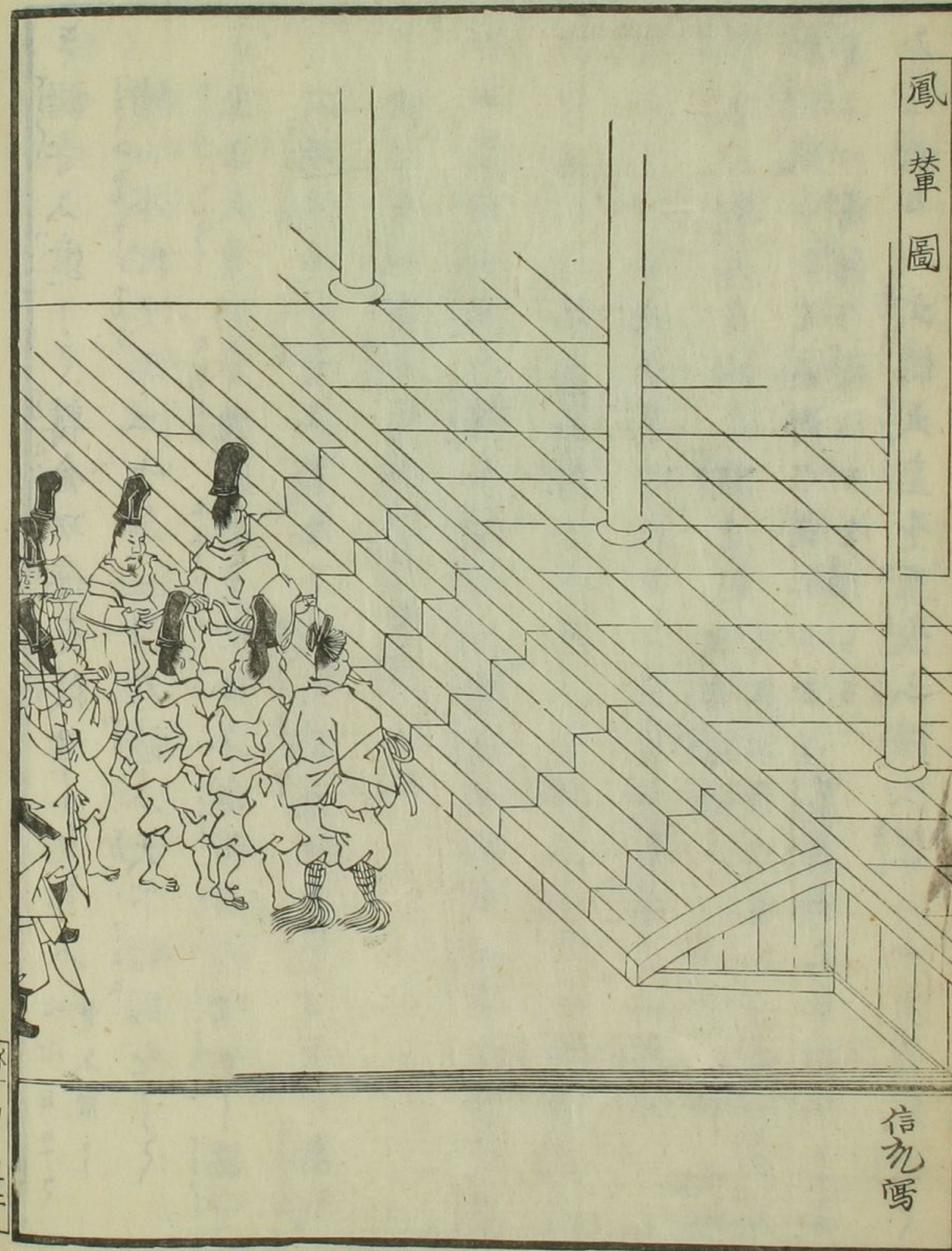
衛尉志番長各一人 兵衛各十九人 五條院了分陣まへ

と申定めらる齋衛元年四月廿六日皇太后と為玉ふ

深敏后乃伯母小皇太子小友祖母了御座也
廿九日大納言安仁左近陣小左右近衛兵衛を喚く鎧甲
を着く内裏を守護さへる中を仰ら也然後小皇太子皇
大夫入同輿小乘冷泉院小皇東宮了遷らせら敷る乃儀
行幸と同く志く警蹕を為也以と那皇此時皇太子御齡
九歳九月二日大納言安世中納言岑継冬義高棟善男文
章博士是善充中辨岑緒大學博士雄継陰陽博士川人名
高及以外記史内記各一人と共に了山城國葛野郡田村郷
真原岡小皇皇々々山陵乃地を定む諸陵式小東西に町
と見也也ハ九五萬七千六百歩許乃地と知る山城各勝
志了法金剛院乃邊りと云國花万葉記小ハ下田と云
処小皇と云日始盈七日了成せ玉小依く使を陵小近
い魚里

水一ノ十一

諸寺小遣々轉念功德を修せし免玉入 七七日月々々
續日本紀天平二十年五月乃條小天下諸國を々々
太上天皇乃奉為小每至七日小國司自親潔女了諸寺
乃僧尼を一寺小聚集く敬礼讀經せし免玉と 勅有
志よ皇以降行も彰く例小皇
日東宮御服を成小羣臣百寮及以五畿七道之小素服
志く毎日之度哀を奉三日小々々終小公卿侍臣表服乃
限日を以く月小易十三日小々々是を釋く也遠所ハ
詔書乃到日を以く期と以 文德實録小 仁明天皇嘉祥
帝成服とあり崩御乃後三日小皇 蓋嘉祥三年の例小
皇小ハ崩御乃後八日を期らる 蓋嘉祥三年の例小
皇一六日 文德天皇を真原山陵小葬たるとハ乾徳



鳳輦圖

信九郎

水ノ下

嘉祥三年深草山陵乃故事（續日本紀）後（天應元年）乃例（准）之也（一）からん
光仁天皇崩御乃時（石）不（可）相（守）文室（八）島
を（作）方相（司）不（任）せら（也）一（品）と太政大臣（ハ）方相（輜）車（各）一（具）
喪葬令（凡）親（王）一（品）と太政大臣（ハ）方相（輜）車（各）一（具）

とあふ義解（方）相（之）熊皮（を）蒙（里）黄金（乃）曰（目）玄衣（朱）
蒙（ふ）く（戈）を執（指）を揚（輜）車（を）導（く）所（以）也（と）見（也）周禮
司馬政官（方）相（氏）時難（之）索室（政）疫（一）大喪（小）匱（極）字（乃）
小先（夫）ち墓（及）へハ（墳）入（入）戈（を）以（以）く（口）隅（を）擊（方）良
を（政）之（を）掌（と）云（ふ）據（れ）一（不）免（一）

七日大夢頭安人（を）真泉（不）遣（く）御葬（小）供（小）辨（臣）を（存）
問（一）女（玉）人（例）か（里）又（五）十僧（を）凌（小）近（寺）及（以）廣（隆）

寺（小）安（置）一（今）日（よ）里（に）十（九）日（不）至（ま）く（轉）經（念）佛（せ）一
め沙弥（女）人（を）凌（邊）不（晝）夜（結）番（一）大佛（頂）之（味）を（修）せ
去（め）期（年）乃（後）不（得）度（を）へ（一）と云（又）内（外）不（詔）一（一）
宣（大）く（期）年（乃）過（密）之（月）を（日）不（易）不（乃）制（不）從（人）と云（共）
率（出）乃（黔）黎（心）表（志）去（く）期（年）乃（際）之（飲）宴（樂）を（作）美（服）を（衣）
之（を）停（出）魚（一）と（也）是（小）嘉祥（乃）先（蹤）を（追）也（一）不（免）一
八日諸衛（鎧）甲（を）脱（く）常（乃）儀（不）復（一）十日（不）及（大）中（臣）
乃（氏）人（を）京（畿）七（道）了（遣）之（一）袂（被）を（修）一（く）素（服）を（釋）一
む（崩）御（よ）里（十六）日（今）日（よ）里（御）服（脱）せ（玉）へ（及）百（官）吉（服）
去（く）朱雀（門）乃（前）不（く）大（被）一（大）里（崩）御（よ）里（廿）日（御）服（被）
十八日所司（始）く（常）乃（御）膳（を）進（る）十月（二）日（鼓）吹（司）始（く）

鼓角を教習し乃聲を發せしむ例あり
前御乃後三十又
家業乃若乃早く音聲を發せしむ
十六日又十僧を廣隆寺
に延く
文徳天皇七七日御齋會を修せし先ら教

續日本紀大寶二年十二月甲寅
太上天皇持統崩

同三年正月丁卯
太上天皇乃奉為齋を大

安藥師元興弘福寺設二月癸卯是日
太上天皇

七々不當使を曰大寺及以曰天皇山田等乃三十三

寺小遣とて齋を設しむと見也是七々乃御齋會乃

證とせし趣し

廿三日陰陽助兼陰陽博士益名高を遣とて
真原山陵

乃鎮謝を為し廿廿日建禮門前大後十一日朔日

天皇即位後あるへし申を告奉る使を伊勢岩神宮小冬向

せしむ是日陰陽寮進不明年乃曆内侍小付く奏覽を三

日大原野春日等祭を停ふ入
伊勢岩神宮使を去らせし

即位乃由を申ふ入と祭奠と乃差別揚鳥あはし考へ

疑乃乃制ふく吉服ふ為せし
天智天皇相原植武天皇

神道と去らる
又日使を公階
天智天皇相原植武天皇

祖嵯峨天皇山陵深草
仁明天皇山陵真原山陵

上女等乃山陵及以愛宕墓
源家基自房乃小遣入

即位あるへし申を告らせし
七日大極敷ふし即位乃

禮を行せし親母藤原氏
明子深敷を皇大夫人入上

云ハ明子女御ふく又仕奉人乃中入仕奉状小依く冠位

を上大神宮より去り諸社乃祿宜祝等ふ一階を給以

僧綱を始諸寺乃知行ある僧并ふ八十以上乃僧尼在
京又畿内乃鰥寡孤獨不能自存乃等小物を給人王天應
乃例乃如一日廿日今日より宇治山崎乃警固を解玉以廿
一日内舍人を御使あし諸關乃警固を解せ給へ及夜入
く近江關乃警固了奉り扱上貞守歸冬る 八月廿六日よ
十日 廿日 伊勢關乃警固の警固奉り藤原菅雄歸冬る
京より里鈴鹿まゝ 廿六日又條后乃職司を今日より皇太
后宮職と改稱し皇太夫人乃職司を中宮職と稱せられ
大史入は兵部大輔兼越前守藤原良仁亮入は右少辨藤
原家宗をかき也大史 長仁ハ皇太夫人乃兄 廿六日美濃
關不破乃警固奉り藤原直道歸冬る 京より里不破ま
水ノ十五

日越中守源啓を御使あし愛宕墓入正一位を贈られ
此を告玉ふ十二月二日前春宮職乃印一枚を内裏入進
春宮職を停八日 淳和天皇乃皇后高志内親王乃忌
又月七日を省き棄玉ふ
淳和天皇ハ 桓武天皇第三皇子 嵯峨天皇皇弟
お里 文德天皇ハ從祖祖父お當里田等親お里高
志内親王ハ 桓武天皇乃皇女お色ハ同一く從祖祖
妹ハ田等親お里田等親の喪ハお帛衣 練を除去
雜色を通用ハと喪葬令不見也
九日 詔志く十陵田墓を定ら數年乃終ハ荷前乃幣を
獻らし也ハ為お里十陵と成 天智天皇ハ階ハ陵 國守

二月三日 志貴皇子 天智天皇 田原山陵 大和國 高市郡 志貴天皇
 二月十一日 光仁天皇 後田原山陵 同上 國志十 贈太皇
 皇后高野氏 大枝山陵 山城國 乙訓郡 桓武天皇
 天皇 柏原山陵 山城國 紀伊郡 老仁天皇 贈太皇
 氏長岡山陵 山城國 乙訓郡 平城 嵯峨 崇道天皇 八
 島山陵 大和國 藤原上郡 桓武 太上天皇 楊梅山陵 大和
 上郡 平城天皇 仁明天皇 深草山陵 山城國 紀伊郡 國
 文德天皇 國邑山陵 山城國 葛野郡 國志三月廿一日 贈太
 政大臣 正一位 藤原朝長 鎌足 多武峯墓 大和國 後贈太政
 大臣 正一位 藤原朝長 嗣子 治墓 山城國 尚侍 贈正一位
 藤原朝長 美都子 嗣子 次守 治墓 同上 贈正一位 源朝長 美

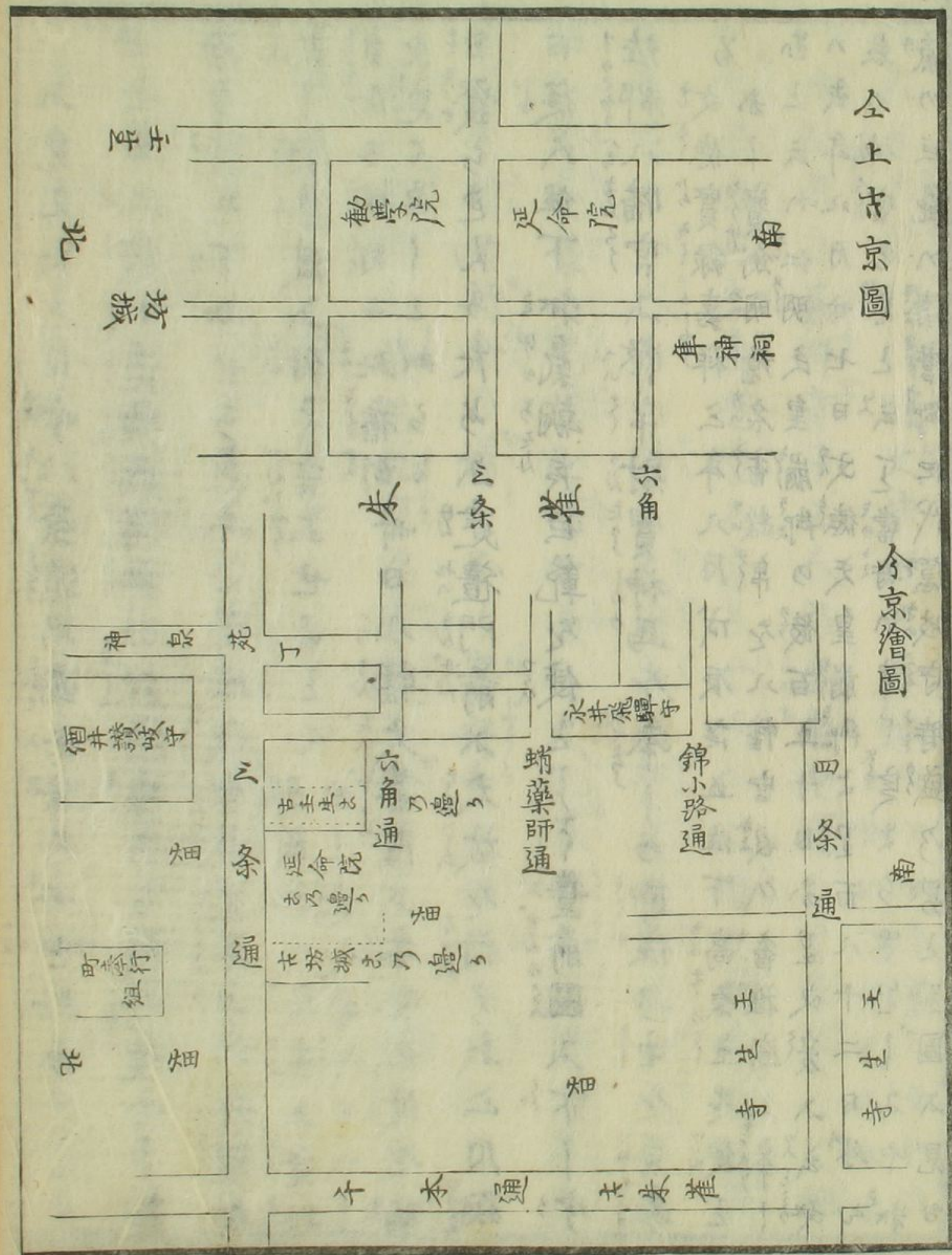
娘 良房 愛宕墓 山城國 志貴 以下侍 後以上
 諸山陵墓 小分 遣り 荷前 幣を獻ら 玉 諫
 使 發遣 あり 丹日 大枝 大難 常乃 如 天安三年 正月 乙
 朝賀を受 玉を以 諫聞 乃故 と 去と 七 雅曆 氷様 腹赤
 魚等 内侍 了 付 奏 進 里 但 節會 八 停 ら 色 大 色 是 青馬
 を 入 覽 せ ら 色 以 八 日 元 興 寺 乃 僧 道 昌 論 を 講 師 と 一
 取 勝 王 經 を 大 極 教 了 講 せ 玉 音 樂 を 是 奉 ら 色 是 と
 乃 最 勝 會 三月 之 會 と 云 然 興 福 寺 乃 維 摩 會 十月 藥 師 寺
 志 業 業 優 長 以 階 を 果 是 者 を 奉 々 維 摩 會 の 講 師 と 云
 志 氏 僧 明 年 大 極 教 乃 講 師 藥 師 寺 乃 講 師 云 請 せ ら 教 云

會己講乃後次小依く僧綱子任せらふと按定ら敷
年中行事正月八日大極殿御齋會あり了始か年中行
事秘抄小称徳天皇天平神護二年正月八日大極殿
於く御齋會を初修せと云を以て起ぬと云里今考ふ
續日本紀天平神護二年の條小此事を記せ也此は
信一難一其後ト所見お一然あり此年より断絶お
く記せお也ハ是歳より里と定むへー

廿七日京畿七道乃諸神小階を進む入と二百六十七社
と抄御齋會を始らふと云實に歸依お一お入の諸神小
階を進む入と云實に神道を興隆おせ也んら為と
知也二月十一日右大臣藤原朝臣良相私乃第一區を崇
親院と名付く藤氏乃支族乃居宅おき者を安置しめん

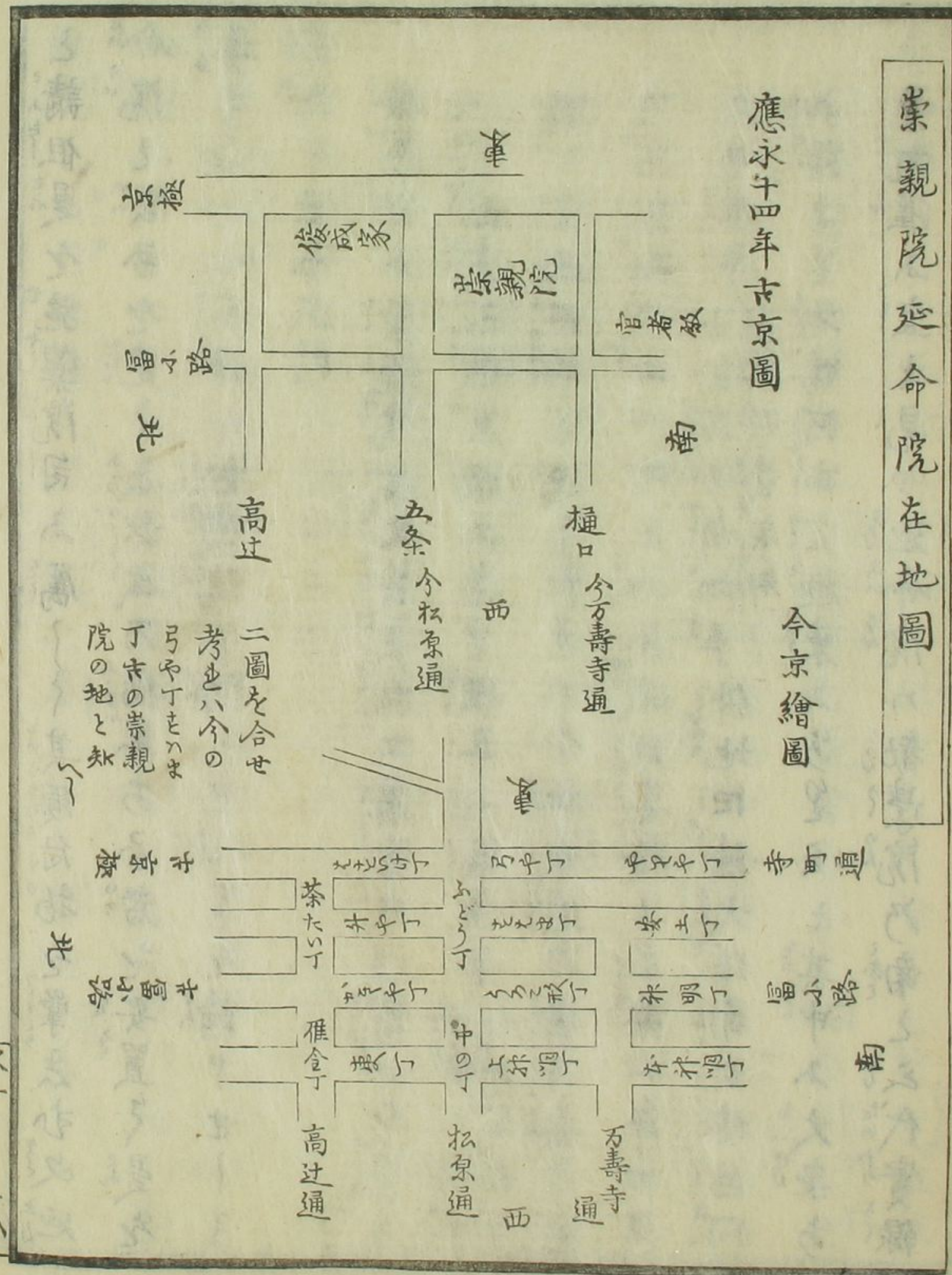
と請但是を施薬院司小属く其須付物を掌去む又延
命院と云を建く後原氏乃病患あふ者を安置く是を
養をんと云其隷を勸學院に附らせんとを請せし
皆許せせ玉以

拾芥抄小崇親院右大臣良相久藤原氏乃貧女を養ふ
一院也東又條京極小あり往年勾當あり
樋ト京極西隅と見え也ハ今松原通乃南万壽寺通
乃北京極乃西一町と知ふ又延喜格了昌泰四年四月
五日官符崇親院河領地在件地ハ條大路南六條坊門
小路より北鴨河西京極東小あり云々其中小大泉あり
皇概灌小宜と見ゆ延命院ハ勸學院乃南と云代實録



今上古京圖

今京繪圖



崇親院延命院在地圖

應永十四年古京圖

今京繪圖

不見え大也は今二条通乃南壬生乃西と知る
廿七日五畿七道諸國諸神の社破壊あらは修理せしむ
陸守使を下知せし教今よ皇以後官長其年中の修理を
記し朝集使ふ付く言上せよと云是敬神の慮慮ふ發輕
貞承の式目と知る舊制廿日八幡大菩薩ふ奉幣の使を明
を運ちせしと知らる日發らせんとためふ建禮門前ふ大後を行たれ二月朔
日從又位下和氣朝長巨範を使とと豊前國ふ下し字
佐郡八幡宮ふ幣帛財寶神馬を奉しめ即位乃由を告奉
る文徳實録嘉祥二年八月戊辰從五位下高原王を使と
出と云ハ仁明天皇崩御の後百五十日お里又愛ふ云如
ハ去年八月廿七日文徳天皇崩御より百八十二日外
然ハ神宮の忌と云と當時いささ里と系圖ふ見也
氣の巨範ハ清唐御に代愿岐守時盛乃界と系圖ふ見也

水一ノ十九

十九日大僧都傳燈大法師位真雅大日如来第八世弘法
表を抗く嘉祥寺三人乃度者を賜し皇悉曇の文相
を教梵字乃字義を學と一人ハは暗く大佛頂の梵
字を書せ一人ハ暗く大隨求乃梵字を書せ一人ハ
暗く悉曇章の梵字を書せ兼く大孔雀明王經佛頂尊勝
梵字を讀せ持念の僧とかく嘉祥寺乃西院ふ住せしめ
十善の鳳輿を護里九重乃寶城を堅くせんと請中けふ
を請のまてり評せせき
嘉祥寺ハ仁明天皇乃奉為ふ建立せさせ給ふ処ふ
く堂ハ先朝乃清涼殿か里山城國紀伊郡深草ふあり
今ハ廢しく安樂行院乃東南ふ嘉祥寺畑乃名を遺せ

二月十八日 詔々天安三年を改め貞觀元年と
す 文德天皇が即位の後十二年諒陰乃礼終る改元
廿八日新錢を鑄す一母文を饒益神寶と云一を以舊
乃錢乃十々當新舊と云々雜用一也

饒益神寶今世より現存せざる乃大様大字大様小字普
通乃三種あり重々今乃一錢二分六釐重今の
八分三
龍尺毛の饒益神寶あり鑄錢の承和八年閏九月廿
九日乃官符ふ一万一千貫文料銅五萬一千二百卅三
斤五兩一分二銖銀二萬五千六百六十六斤十兩二分
四銖合七万七千七百七十五斤と見也當時乃七百七十五斤と今の
一万二千八百六十貫目あり是を一万一千貫文除

水一ノ世

ハ一錢二分六釐當今

五月十日大内記安倍朝臣清行左大臣倉橋磨五代大納言安仁乃男と系圖不出

及以加賀國司等渤海國王乃啓牒と信物を奉進る是ハ

去二月四日渤海國乃使馬孝慎副使周元伯等能登國了

着大里一を加賀國ふ安置く禮を行を都の内ハ入ら

色々終ハ也

渤海國乃五代史より本鞞鞞と號し高麗乃別種あり唐

中宗の時渤海郡王ふ封せらる一は里遂ふ渤海と號

を其貴族乃姓を大氏と云と見也多賀城碑ハ鞞鞞國

畧を去三千里とあるふ々遠近ハ推量く知へ

六月廿三日勅書を渤海國王より賜ハ文馬孝慎より東絶十

五足綿四百屯今の比十を賜ふと云廿八日文章博士乃
職名田元口町を給たり了今改之六町と云々家博士
を褒賞の優政と聞也田一町稻五百束以定ふ之
量百石斗六升五合五勺八月廿一日六十
人乃僧を雙立寺に請一五箇日を限里法華經を讀誦
め文徳天皇周忌乃齋を修せら敷皇太后乃御願と
廿七日御齋會了冬集せ親王公卿五位以上を及式部
省點檢之茶薄を奏せしと云後世廟參墓委の十一月十
六日朝堂院乃齋教了幸し大嘗の祭を奉り給ふ十七
日豐樂院乃宴十八日悠紀帳乃宴十九日百官乃宴田舞
久米舞志舞倭舞五節等々へ例乃如し

水一ノ世一

朝野群載不清水護國寺畧記を載云行教俗姓貞
觀元年豐前國宇佐宮に冬拜一夏九旬已畢本都に
歸んと欲の間七月十日夜を以て行教了示仰之宣
く吾深汝く修善を感應を迹都に後坐る國家を後
まへへ云々同廿日土系八月廿三日山崎離宮乃邊に
到る同廿八日夜示宣く後坐處に不清水男と
云峯也云同九月十日勅使下向實檢點定次
未之推允良基不宣下あり六字乃寶牒を造しむと
あまの八不清水八幡宮に貞觀元年に移し奉るに明り
也行教武内宿禰十九代紀魚粥乃二男あり清和源氏
不清水を尊崇あまを
出乃由縁と知也た里

二年二月十日從入位上行大學博士春日朝臣雄繼孝經
を天皇の授け奉る御實筆 正入位上行大學頭豐階真
人安人都講とあり正入位下守推左中辨兼行式部少輔
大枝朝臣音人正入位下守右中辨藤原朝臣冬緒等席ふ
預也里五月八日 淳和天皇二十一回乃御忌也也
淳和太后西院后と云今年御歳五十一 齋會を修させ
給ひ五日を假里と法華經を讀せ玉人由を 敬閉めさ
也皇太后と共米六百斛今量五百八十一石八斗六升
二合 米一升今量二斗八升八斗六升
二合 鹽三十二斛今量三十一斛二升二合六勺 撮今量
一斗八升八斗六升二合六勺 飯今量一萬六千九百九
十九貫 九百六十枚海藻三萬三子三百三十斤今量一萬九千九百九
十九貫

新錢十二萬五千文舊錢百二十五萬文 子准を喜捨かき也之齋會
を助修せら也之施入逢奉 僧尼優婆塞優婆夷隱居飢
窮乃草二萬九子六百七十人とかや 一人元米二升餘
行乃祖付法事かと 八月廿七日 文德天皇乃國忌を始
て西寺に於て修し玉人依て所司廢務三回乃國忌 十月十
六日開元御註孝經十八章を學官に立てて試業充て 但
學の博を厭ふ以孔註を講誦乃心ある者了は是を聴せ
と制を下さ也也 大寶令に孝經の孔安國鄭玄註とあ
り十一月朔旦冬至に當也里とく公卿表を抗て賀し玉人
蓋曆家乃説き二日冬至ありと定め天皇の菅原長善
大枝音人藤原冬緒春日雄繼有宗益門等り議不從也也

十月を大と名一二月を朔了更ら也一朔里十六日 詔
去々徒罪以下輕重を論せ以皆免除せら不朔旦冬至ふ
依く也

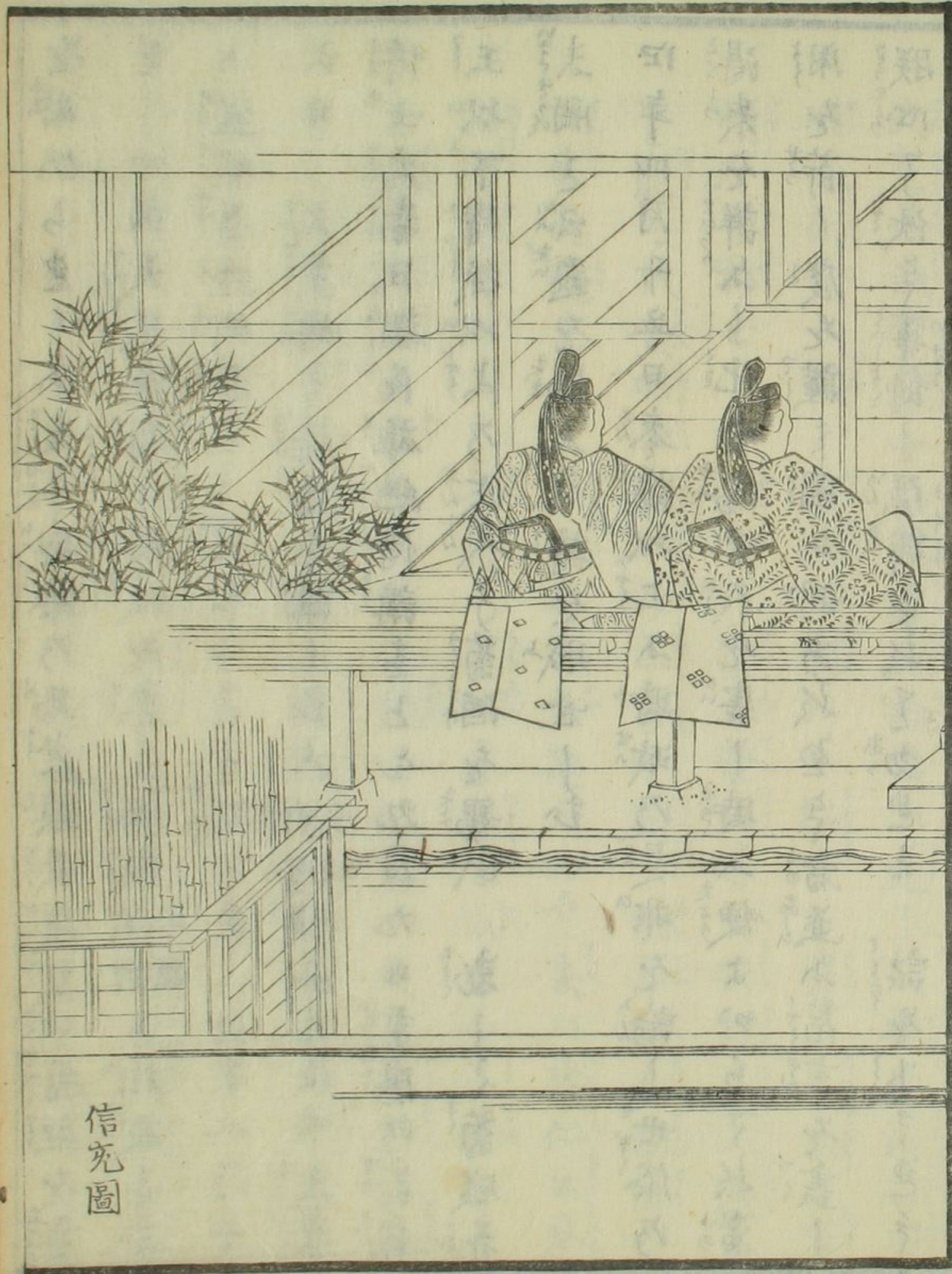
江家次第不桓衣延曆三年十一月戊戌朔行慶賞免田
租云々是本朝朔旦冬至始く國史不見一之其後延曆
廿二年十一月戊寅朔旦冬至弘仁十三年十一月丁巳
朔旦冬至承和八年十一月丁酉朔旦冬至貞觀二年十
一月丁丑朔旦冬至至ふ

十二月八日新修釋奠式を七道諸國不領下々不是よし至
前播磨國博士正八位上和近部臣宅継之申請不從く大
學乃式と諸國乃式及ひ上丁國忌祈年祭不當れハ中丁

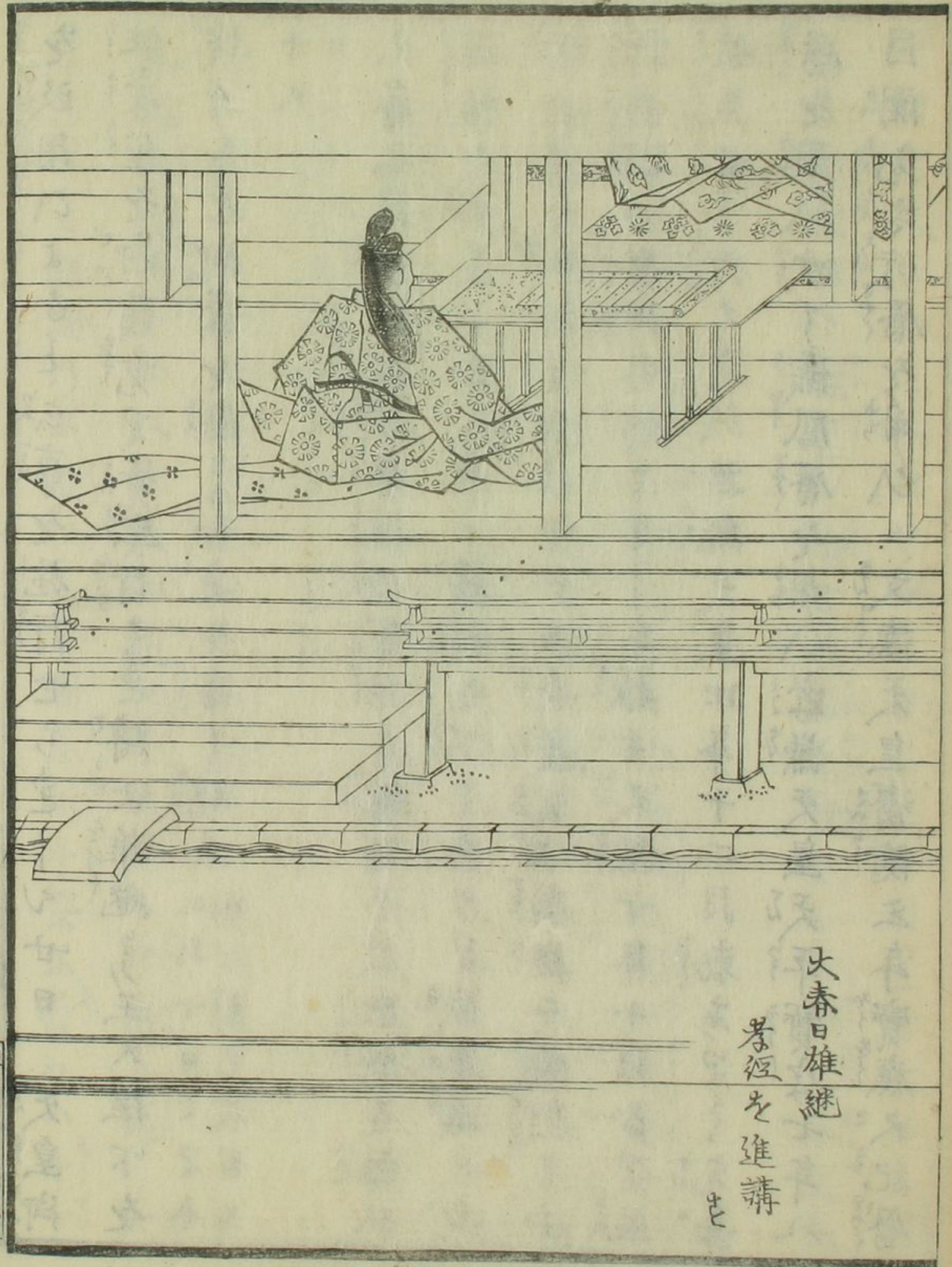
を改用ひよかと云事を施行せら也一廿日 天皇御

注孝經を御讀竟り竟宴行を也博士雄継了正文位下を
授けら也御筆を深く書く賜入 二月十日よ里今
十八

三年三月廿六日陸奥國馬軍用了堪極き及牝牡を論以
國場を出さと云と嚴制を下さ也々里陸奥國を邊
要か也成極一六月十六日長慶宣明曆經を頒行も不
抑我國不曆術乃傳せ里一也推古天皇十年十月か里然
共未せ了行も也以持統天皇十二年勅あま々元嘉
曆を用ひ次了儀鳳曆を用ひ孝謙天皇天平寶字七年八
月開元古術曆を和ひ 文德天皇齊衡三年寶應又紀曆



信充圖



大春日雄繼
孝經先進講
也

を用ひらばし去年渤海乃馬孝慎長慶宣明曆經を貢
里しかば天文を察し時候を冬し西經大衍此校を
宣明曆經術精去と定めらば改らばし如里八月十
六日 天皇始く論語を講し玉ふ 御寶算 正六位下大尊
博士大春日朝臣雄継侍講と云九月九日重陽乃節親
王以下侍従以上乃文人菊酒を賜ひ 勅し菊暖花
未開と云題を賜ふ詩を賦せしむ
四年四月十五日冬議以上時政乃是非を論し世俗乃
得失を詳ふし化を傷里人を害し時不便よからば者
閑を節し度を謹之國不利あはれ者並小昌言を盡し
朕心之次を華飾し德諱を致し勿也と 詔を下さばし

天皇是歲寶算十二能孝經論語を通し 敬思濬哲昭
明了在さる故く廣詢下問乃 詔旨を發し忠良乃衷
情を甲析せしむ上古乃聖主哲王と云共能是不過る
之能を以豈昭帝燕王乃上書を辨し明帝河南南陽の
田宅を説せしと同日志く云魚をんや去ハ忠仁公外
戚乃尊貴し之擢録乃重任了展と云と小子弟を
暴ふ顯要ふ立しむ不之能を以蓋 天皇幼冲不在
と云共英烈威嚴長君不超拔せし勢らば故あは
る

十二月廿七日右大臣良相上表志く右大辨南淵朝臣
名山城守紀朝臣今守伊豫守豊前王太宰大貳藤原朝臣

冬緒大和守弘宗主等ハ冬儀以上了ありき也共當世
ハ樞要良吏の先鳴ル一々老成と云流名あり侍人等ハ
意見を上らむと請申入依申乃まゝ聽入給入
五年二月十日正四位下右大臣兼勅解由長官南淵朝臣
年名左大臣辨小後也 正四位下位田廿四町此稻一萬二千
二合あふ毎斗入十斗入十斗入十斗入十斗入十斗入十斗入
食封絶十疋綿十疋布又十疋庸布之百六十疋常を給き
後口位上行左京大夫兼山城守紀朝臣今守大和守小轉
任 後口位上位田廿町米今量に百八十石八斗八升又
八天綿八屯布に十疋端庸布之百常と大和守乃職田二
町六段乃米今量六十石余及公廩十七百石又石又
斗余あふへ一總く斗入又千 世しむ 天皇人材を舉
剛ハら新く始お里之月十八日諸國乃牧宰私了鷹鷄を

養王を禁らふ蓋貞觀元年八月御鷹乃貢を止らば亦國
司乃鷹を養ハ鳥を逐之を制せら新くと云共尚殺生を
好むら故了重ねる制了給入五月廿日左近衛中将藤原
基經右近衛中将内藏頭衣原常行を々々神泉苑ハ放る
御靈會を修せしむ律師慧達金光明經一部般若心經六
卷を講し雅樂寮伶人樂を作し 天皇近侍兒童及ハ良
家雅子舞人とか里大唐高麗更出々其能を盡き間ハ新
羅散樂其藝を陳ねる也及苑乃口門を開る都邑人乃從
觀を許させり之
御靈とハ崇道天皇 桓武天皇乃弟早良親王天應元年
ハ遷せり途入水邊を断る薨同 伊豫親王 桓武天皇
十九年七月崇道天皇と追稱也

藤原夫人 吉子或智磨乃四男乙磨乃二男右大臣是公
 誕里大同二年十一月事坐世ら也母子共 橋逸勢 兼
 小川京寺小幽せらる依る薬を仰る亮逝 和
 九年七月謀及一 文室宮田磨 兼和十年十二月謀及 等
 伊豆國小流さる 伊豆國小流さる
 を云並ふ事小坐し 誅せら也冤魂厲を成り故了 瘵
 病あし 死亡甚衆と云京畿より外國了及ふ夏よ
 里秋かけ 御靈會を終ま敷とあり今茲春初より咳
 逆疫流行し 大納言原定卿 正月二日薨 内藏頭兼原興邦
 正月五日卒母冬嗣公乃女 中務大輔清原胤雄 正月十
 女里皇太后の後弟小當る 助教滋善宿祿宗人 正月廿
 大原内親王 平城天皇皇女 棟氏王 正月廿二日卒 大納
 純子内親王 正月廿一日薨 天皇皇女 近江權守良峯
 言原弘卿 正月廿日薨 統朝長忠子 同上 度知 近江權守良峯
 又日薨 天皇皇女

清風 四月十日 冬議刑部卿越前權守正躬王 五月朔 尚藏
 五日卒
 從三位菅野人數 五月十九日薨 等累不物故 百姓
 亦多く斃しか故了人情を安かき也ん 爲了朝廷不
 了由御折有しを以て會を終ま也 宿禰小賽あし
 給人と也
 十月廿一日太政大臣良房 在內教不寡し 満六十乃
 を賀し玉衣被寶物乃贈一色玉子六乃數ふ叶人殺ふ
 せせせら也特不諸大史年六十以上乃者を仗頭了喚く
 酒を飲しめ川相國乃家令及ひ家女房等も位を賜ふ
 玉品あり十一月廿六日中宮 皇太后 太政大臣乃深殿乃
 第ふ大齋會を設く 大乗經を講演せしめ三日を限り満

六十を賀せり公卿大夫陪從は教者多し十二月廿日
日中宮の廣譙を設く親王以下五位以上を喚衣被を賜
ひ歡を極め満六十乃賀を祝し玉ふ
六年正月戊子朔大夫の豐ふ教 天皇元服を加へ紫宸殿
に御あり親王以下五位以上開門長樂永安より入殿
庭了拜賀を教を受玉ふ百官六位主典以上は春華門乃
南ふ於く拜賀を 春華門を拾芥抄ふ左馬陣と云ふ是よ
里前勸學院藤氏乃兒童高に尺六寸以上乃者十三人
詔ありく加冠せし兒ら色しを内殿了喚見玉ふ是日太
政大臣良房攝政を罷ら教
天皇是歲實年十五ふ満玉ふ平城天皇十五歳元服乃

故事小浴敷を色し形らん但夏敷より天子皆十
二ふし冠を故ふ文王十二ふ志く冠し十三の伯邑考
を生り尤傳ふ冠し子を生禮也と云是か里又成王
十六ふし冠を周公史ふ命し祝辭を作ふ是より
志く十五成童國君十五ふし子を生し玉以く冠を
賜ふ乃義を明以と云泰始乃奏議し起れ里皇朝も亦
是ふ準據せら也し形分也
七日皇太后順子を太皇太后ふ皇太夫人 明子を皇太后
ふ上なる給ひ凡人乃子夫者悦ふ時必し以親を
崇饒し乃と聞めと 詔し太神宮を始諸社乃祿宜
祝諸寺の僧尼又ハ五位以上子孫等ふ至五位階一級を

賜以京官乃典以上乃帛絮を賜以又火辟已下乃
罪輕重之形く咸去也を赦す也諸乃老人百歳以上ハ
穀五斛 米今量二石 八斗に升余 九十以上ハ三斛 今量二石 九斗余 八十以
上ハ一斛 今量九斗六升 九合七勺七撮 を賜以孝子順孫義夫節婦を
は門閭を表す終身事あり去め寡孤獨篤疾重病
不能自存ハ物を賜入を品あり

漢景帝後三年正月皇太子冠を民の父乃後太子者ハ
爵一級を賜以宣帝五鳳元年皇太子正月を以て冠を
丞相以下ハ帛を賜以徒を赦すと漢書不見之天里是
等ハ依る皇朝ハくハ行くと也ハ形不獨ハ
廿七日後曰位下藤原朝長多美子を冊志く女御と以

臣良相公女母ハ從 二月二日 天皇乃琴師從ハ位下行
五位下大江乙枝女 越後介高橋朝臣文室磨卒文室磨九歳ハく 嗟噫太
上天皇ハ事く琴を學以其伎日ハ長く相及者ハく
文徳天皇及ハ 天皇 光孝天皇本康親王皆繼く琴を
學以ハ人 天皇萬機ハ暇讀書を勉む琴を學ハ世 十六
日僧綱ハ位階法印大和尚位 僧正 法眼和上位 僧都 法橋
上人位 律師 乃ハ階を割くハ僧乃滿位法師位 大法師
位乃ハ階ハ別ハ蓋ハ僧都真雅の奏状ハ依るハ
是日冬議大藏卿源生及ハ少納言侍從藤原諸葛ハ西
寺ハ綱所ハ遣ハ真雅ハ法印大和尚僧正ハ 都傳燈
大法 明詮ハ法眼和上位 大僧都 元少僧都傳 慧運ハ法
師位

眼和上位少僧都元律師傳燈 真紹を法眼和上位推少
 僧都大法師位 最教額曉明哲光善を法橋上人位律
 師元傳燈大法師位 慧教真慧正進道昌道詮興照常曉を法橋
 上人位推律師元傳燈大とかゝる僧正一員大僧都
 推少僧都一員律師法師位 是出乃云階乃濫觴あり
 四員推律師七員
 廿五日太政大臣良房乃東京深殿第ふ幸ありく櫻花を
 觀之し給ふとく暫一條第ふ駐蹕らとしかば太政大臣
 扈後乃文武官ふ肴醴を饗し緑物を庭上り云積して
 戲覽を徑々後群臣ふ延賜し終り花亭ふ幸あり伶人樂
 々奏し文人女を屬し詩人詩を賦し飲を極々のち射場
 々御世給ひ 天皇弓矢を執り一發鵠の中ふ人群長萬

